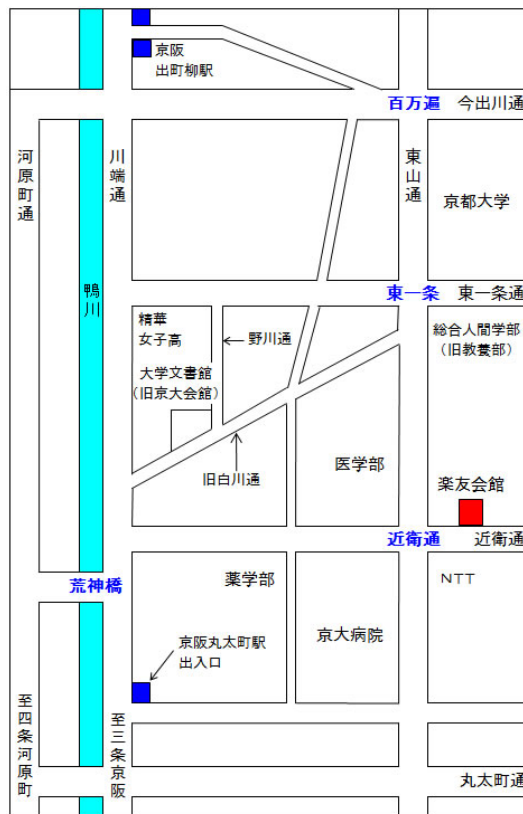


インド思想史学会 第21回学術大会 プログラムと発表要旨

開催日：2014年12月20日（土）

会 場：京都大学 楽友会館

京都市左京区吉田二本松町 TEL: 075-753-7603



〒606-8501

京都市左京区吉田本町 京都大学人文科学研究所気付
インド思想史学会事務局

TEL: 075-753-6949 (藤井) / 2460 (横地)

E-mail: hit@zinbun.kyoto-u.ac.jp

http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~hit/

本状は郵便での送付に先立ってメールでも会員の皆さまにお送りしています。本状を添付したメールが届いていない会員の方には、メールアドレスが未登録ですので登録をお願いします（本文にお名前を書いたメールを事務局 hit@zinbun.kyoto-u.ac.jp にお送りくださるだけで結構です）。

インド思想史学会 第 21 回 (2014 年度) 学術大会のご案内

インド思想史学会会長 井狩彌介

インド思想史学会第 21 回学術大会を下記の通り開催いたします。
皆様、どうか万障お繰り合わせの上ご参加ください。

記

開催日 2014 年 12 月 20 日 (土)

会 場 京都大学 楽友会館 2 階 会議・講演室

(理事会 11:30 – 12:30 京都大学 楽友会館 2 階 会議室 5)

参加受付 12:30 – 京都大学 楽友会館 2 階 会議・講演室前

参加費：1000 円 懇親会費：3000 円

研究発表者および発表題目

13:00 – 13:50 Jonathan Duquette (JSPS Postdoctoral Fellow, Kyoto University)
“On Appaya Dikṣita’s Engagement with Vyāsātīrtha’s *Tarkatāṇḍavam*”

13:50 – 14:40 川村 悠人 (広島大学・日本学術振興会特別研究員 PD)
「文法学伝統における *Bhaṭṭikāvya* の地位—非文法的表現 *subhru* 正当化
の歴史—」

—— 休憩 ——

14:55 – 15:45 山崎 一穂 (東洋大学・日本学術振興会特別研究員 PD)
「Kṣemendra の仏教説話作品における 莊嚴法 について」

15:45 – 16:35 藤井 正人 (京都大学・教授)
「Jaiminīya-Upaniṣad-Brāhmaṇa の再生説の諸相」

—— 休憩 ——

16:50 – 17:40 澤井 義次 (天理大学・教授)
「『師と弟子の関係』(*guruśiṣyasambandha*) の意味構造—シャンカラ派の
宗教思想への宗教学的な視座—」

総会 17:40 – 18:00 (発表終了後、引き続き 2 階 会議・講演室で)

懇親会 18:15 – 20:00 楽友会館 1 階 食堂にて

On Appaya Dīkṣita's Engagement with Vyāsatīrtha's *Tarkatāṇḍavam*

Jonathan Duquette¹

Abstract

The 16th-century South Indian polymath Appaya Dīkṣita is well-known for his harsh criticism of the Dvaita Vedānta school. This article sheds light on his relationship to the other great luminary of 16th-century South India—the Mādhva Vyāsatīrtha. Appaya's engagement with the *Tarkatāṇḍavam*, Vyāsatīrtha's celebrated treatise of epistemology and logic, is here discussed in relation to two rather unstudied works of Appaya: the *Upakramaparākrama* and the *Śivārkamaṇidīpikā*. This analysis will reveal a deeper relation than usually attested between both Sanskrit intellectuals while raising questions about Appaya Dīkṣita's literary practice.

¹ JSPS Postdoctoral Fellow, Kyoto University, Kyoto, Japan. E-mail: joduquette@gmail.com.

文法学伝統における *Bhaṭṭikāvya* の地位—非文法的表現 *subhru* 正当化の歴史—

日本学術振興会特別研究員 PD (広島大学) 川村 悠人

6世紀から7世紀の北インド、マイトラカ朝の首都ヴァラビーで活躍した宮廷詩人バツティは、サンスクリット教育の需要が一気に高まった時代の要請に応えるべく、文法実例書 *Bhaṭṭikāvya* を著した。同書は、大叙事詩 *Rāmāyaṇa* を題材にラーマ物語を描写しつつパーニニの文法規則を例証するという手法を通じて、パーニニ文法学とそれに基づく正しい言語使用を教示することを企図した作品である。このような作品の性格から、同作品はボージャヤクシェーメンドラ等といった後代の詩論家達により美文論書 (*kāvyaśāstra*) という名を与えられている。

バツティ以後のパーニニ文法家達が、或る時はバツティの表現により自身の規則解釈を根拠づけるため、また或る時はバツティの表現を擁護し正当化するため、そして或る時はパーニニ文法学の観点からバツティの表現を否定または訂正するために *Bhaṭṭikāvya* 中の詩節を頻繁に引用し、多様な議論を展開していることから、同書がパーニニ文法学の分野に多大なる影響を与えたことは疑い得ない。したがって、文法学史上における同書の位置づけに関する考究は *Bhaṭṭikāvya* 研究及びパーニニ文法学研究にとって極めて重要かつ有益である。しかし従来の研究では、*Bhaṭṭikāvya* のサンスクリット文学史並びに詩学史上の位置づけに関する活発な議論がなされる一方で、同書が文法学の伝統の中で如何なる地位を占めていたのかを探る本格的な論考はなされてこなかった。

本発表は、新文法学派バットージディークシタ (16世紀後半–17世紀早期) が *Siddhāntakaumudī* 中で問題視するバツティの非パーニニ文法的表現 *subhru* (*subhrū* 「美しい眉の女」 voc. sg. f. 正規形 *subhrūḥ*) に着目し、上述の問題に具体的考察を加えることを目的とする。考察の材料として *Siddhāntakaumudī* において引用されるバツティの表現を選び、その中でも当該表現に注目するのは次の理由による。

- 基本的にバットージは問題があるバツティの表現を擁護、正当化し (SK 859、SK 2965、SK 2743) 自説や他説を根拠づけるため、教養文化人達 (*śiṣṭa*) の言語運用に適うものとしてバツティの表現を引用する (SK 361、SK 2462、SK 2512、SK 2518、SK 2853)。*subhru* が扱われる SK 306 はバットージが *Siddhāntakaumudī* 中で唯一バツティの表現をパーニニ文法に反するものと宣明する箇所であり、その意味において重要かつ興味深い箇所である。
- *subhru* という語形の問題はバットージの別著 *Śabdakaustubha* においても論じられており、そこでは当該語形に関する彼以前の文法家達の様々な見解が提示される。それらの検討を通じて、*Bhaṭṭikāvya* が著されてからバットージに至るまでの文法家達の解釈の歴史を見渡すことが可能である。
- *Siddhāntakaumudī* には、バットージによる自注 *Praudhāmanoramā* をはじめとして優れた注釈書が数多く著されている。それら注釈文献により、*subhru* という語形に関する種々の解釈を考慮することができると同時に、バットージ以後の文法家達がバツティの表現に対してどのような態度をとったかを探ることができる。

本発表では、代表的な文法学文献とその注釈文献を精査して、バツティの非文法的表現 *subhru* に対するパーニニ文法家達の見解を詳細に考察する。そしてそれにより、*Bhaṭṭikāvya* が彼らに与えた影響の大きさを実証し、同作品が規則解釈の際に考慮されるべき権威ある準文法学文献として確立されていたことを明らかにする。加えて、美文学と文法学の両観点から、*Bhaṭṭikāvya* が文法家達の注目を集めた理由についても検討する。

Kṣemendra の仏教説話作品における〈莊嚴法〉について

日本学術振興会特別研究員 PD (東洋大学) 山崎 一穂

多方面の著作を残したことで知られる 11 世紀カシミールの宮廷詩人 Kṣemendra は、同地域の仏教徒によって伝承されていた説話を集め、韻律 *anuṣṭubh* を基調とする韻文体に改稿し、全 108 章からなる説話集 *Bodhisattvāvadānakalpalatā* を西暦 1052 年に著した。Kṣemendra は同作品を著すにあたり、Gopadatta (400–800 年の間) の *Jātakamālā* に認められる、物語の筋を骨組みとして用い、それに過度の粉飾を凝らすという著作姿勢をとらず、自らが材源とした説話の筋を忠実に再現している。しかし一方で彼は物語の進行を妨げない範囲で季節描写 (59.18–21) や日没・月の出 (59.122–127) といった古典詩論家が美文作品 (*mahākāvya*) に求める要素を加えており、仏教徒のみならず、ヒンドゥー教徒に自作品を好ましい形で提示しようとい図っていたことが推定される。

この説話材源の潤色にあたり、Kṣemendra はどのような詩論を前提としていたと考えられるか。残念ながら *Bodhisattvāvadānakalpalatā* に関する先行研究はその説話材源の解明を目的としたものであり、Kṣemendra の著作姿勢に関する本格的な考察は未だなされていない。しかし Kṣemendra が活躍した時代は詩論家 Rudraṭa (九世紀後半) に代表される〈莊嚴法〉 (*alaṃkāra*) に重きを置いた詩作から、Ānandavardhana (九世紀) が提唱した非言詮の〈暗示〉 (*dhvani*) を重視する詩作へと古典詩人の関心が移行する時期にあたる。従って *Bodhisattvāvadānakalpalatā* における Kṣemendra の著作姿勢を明らかにすることは、11 世紀におけるサンスクリット古典詩の歴史を明らかにする上で意味を持つと考えられる。

本発表は *Bodhisattvāvadānakalpalatā* 第 72 章 Upagupta 第 33、36 詩節に注目し、そこに見出される二種の〈莊嚴法〉、すなわち〈掛詞による隠喩〉 (*śliṣṭa-rūpaka*)、〈頭韻〉 (*anuprāsa*) の用例を 8–11 世紀カシミールの詩論家の理論と照合し、彼の著作姿勢を明らかにすることを目的とする。

本考察からは概ね次のような結論が導かれる。(1) Kṣemendra が適用する〈掛詞による隠喩〉、〈頭韻〉は Rudraṭa に代表される詩論家の規定に対して厳密でなく、前者では意味の重複を許す、後者では継起する子音が異系列子音と結合するなどの点で欠陥を生じている。(2) しかし Kṣemendra は自らの詩論書 *Aucityavicāracarcā* 第 11 詩節の例証において、Dharmakīrti (七世紀) が無意味な〈頭韻〉の遊戯に耽っていることを批判している。他方彼は同書第 16 詩節の例証において、*Bodhisattvāvadānakalpalatā* 第 72 章第 33、36 詩節のそれと同じ〈頭韻〉が同じ文脈で用いられている例を挙げ、〈頭韻〉が〈嫌悪〉 (*bībhatsa*) の〈情〉 (*rasa*) を表現し得ていると説明している。この事実を照らして Kṣemendra は *Bodhisattvāvadānakalpalatā* を著した段階で〈莊嚴法〉よりも〈適切性〉及び〈情〉を優先する著作姿勢をとっていたことが推定される。

Jaiminīya-Upaniṣad-Brāhmaṇa の再生説の諸相

藤井正人(京都大学)

Jaiminīya-Upaniṣad-Brāhmaṇa (JUB) はジャイミニヤ派サーマ・ヴェーダに属する最初期のウパニシャッドである。同じく別学派のサーマ・ヴェーダに属し、多くのパラレルをもつ Chāndogya-Upaniṣad に比べて、言語・文体・内容の上でより古い特徴を示している。白ヤジュル・ヴェーダの Bṛhadāraṇyaka-Upaniṣad (BĀU) とは対応関係が少なく、成立の先後を決定することはむずかしいが、唯一のパラレルである JUB 1.60-2.12 と BĀU 1.3 に関して、後者は前者(最高存在としてのブラーナをめぐる同一内容の連続する4バージョンからなる)の最終バージョンから一部そのままの形で取られたものである。サーマ・ヴェーダのウパニシャッドとして、JUB はサーマン(祭式歌詠、旋律)、特に Jaiminīya-Brāhmaṇa から JUB にかけて展開したサーマンの変化を背景に、その最終形態である歌詞を伏せて歌われるサーマン(「身体のないサーマン」)の意義づけを内容の中心とし、それに関連して、ことば、ブラーナ、Om などについて思弁を展開している。

JUB のもう一つの特徴は、さまざまな内容の再生説をまとめた形で説いていることである。再生の観念はリグ・ヴェーダにすでに現れているが、ブラーフマナにおいては祭式の効果として天上界に昇り、再生することがさまざまな文脈で繰り返し強調されている。これらの再生説がその後、初期ウパニシャッドで明確な形をとる輪廻思想へつながっていくことは、これまでの研究によって明らかにされている(井狩、後藤)。JUB の再生説は、ブラーフマナと初期ウパニシャッドの間に位置する過渡的なものであるために、輪廻思想の成立史においては周辺ないし傍流と見られているが、そこに示された発達途上の再生説の諸相に、輪廻思想の形成過程についての貴重な情報が含まれていることは無視できない。本発表では、JUB の再生説の諸相をまとめて提示するとともに、それぞれに関して、他の文献の関連箇所を集めて比較することによって、それらを再生説の展開に関する思想史の中に位置付けることを試みる。JUB に現れる主な再生説ないしそれに関連する説は以下のとおりである。

- 1) JUB 1.3-5: 身体(歌詞)のないサーマンによる天上界への上昇。o vā の3度の繰り返しによって三界をのぼり、天空の孔である太陽を通して天上界に至る。天上界の入口で神格との対話「お前はこれこれの悪をなしたので通れない」、「私がするのを見ていたお前こそが行為者だ」。
- 2) JUB 1.28-30: 太陽の7つの光線と諸方位、個体の諸機能、宇宙の諸存在との対応。サーマンによってそれらの光線にそって上昇し、太陽に至り、その中に開放される。
- 3) JUB 1.46-48: Prajāpati が自身を16の部分に分けて、各部分に対応する存在の諸様態、個体の諸機能、宇宙の諸存在を創造する。[cf. 3.20-28]
- 4) JUB 3.8-10: 人間は三度生まれる。一度目、父から、二度目、母から、三度目、祭式から。人間は三度死ぬ。一度目、精子として放出されるとき、二度目、潔斎するとき、三度目、火葬の薪の上に置かれるとき。
- 5) JUB 3.11-14: 人間は三度死ぬ。一度目、精子として放出されたとき、二度目、潔斎するとき、三度目、死ぬとき。身体(歌詞)のないサーマンの o vā の3度の繰り返しによって祭主に三界を獲得させ、空間、謝礼、来世のそれぞれを与える。天上界での問「お前は誰(Ka)か」と、誤った答「私は某だ」と正しい答「私はKa(であるお前)だ」。(= JB 1.18)
- 6) JUB 3.20-28: 天に昇った死者が、宇宙の諸存在(地、火、風、中空、方位、昼夜、半月、一ヶ月、季節、一年、ガンダルヴァ、アプサラス、天、神々)から、それらの中に置かれていた彼の身体の各機能の返還をうける。最後に地上に再生することへの言及がある。
- 7) JUB 4.8-10: サーマンによって祭主を身体をもつもの、四肢をもつものとして天上界に生まれさせ、死の束縛を取り除く。

「師と弟子の関係」 (guruśiṣyasambandha) の意味構造
—シャンカラ派の宗教思想への宗教学的な視座—

澤井義次 (天理大学)

この研究発表は、シャンカラ (約700—750) の思想をシャンカラ派の宗教伝統という具体的脈絡へ引き戻して捉え直そうとする一つの試みである。ここでは、特に「師と弟子の関係」 (guruśiṣyasambandha) の意味構造に焦点を合わせながら、シャンカラ派伝統において説かれるシャンカラの思想の特徴を宗教学的視座から考察したい。

シャンカラ派の伝説によれば、シャンカラは約300もの著作を著したと言われる。ところが、文献学的に「真作」と認められるのは彼の哲学文献だけで、シャンカラ派伝統における人々の信仰を支えてきた讃詩 (*bhakti-stotra*) は「偽作」と考えられる。それはシャンカラが解脱の直接的な手段として、ブラフマンの知識 (*jñāna*) を強調したのであって、神へのバクティ (*bhakti* 信愛) を説いたわけではないからである。ところが、シャンカラ派伝統では、伝統的にシャンカラに帰せられているすべての著作は人びとを救い、あるいは解脱へ導くために、シャンカラが著したものとして受けとられている。文献学的に「偽作」と考えられる著作も、宗教学的な視座からみれば、シャンカラとその思想がその宗教伝統の人々によって、どのように受け入れられてきたのかを示す具体的なデータとして捉え直すことができるであろう。

シュリンゲーリ僧院を中心としたシャンカラ派伝統はシャンカラを開祖としている。その宗教伝統は出家遊行者と在家信者によって構成されている。彼らは世師 (*Jagadguru*) すなわちシャンカラ—チャーリヤとのあいだに、それぞれ出家遊行と在家という二重レベルにおいて、「師と弟子の関係」にある。この師弟関係がシャンカラ派の宗教伝統の基本構造をなしている。哲学文献であれ讃詩であれ、伝統的にシャンカラに帰せられる著作の存在は、シャンカラ派伝統における「師と弟子の関係」の二重性を示唆している。出家レベルにおける宗教思想はシャンカラの哲学文献に沿っているが、在家信仰レベルにおける宗教思想は、シャンカラの本来の宗教思想にはみられないものである。たとえ在家信者であっても、その信仰がすべてを超越する最高ブラフマンに向けられているかぎり、解脱あるいは救済の可能性を説いている。

シャンカラ派のこうした宗教思想は、シャンカラの本来的な不二元論ヴェーダーンタ思想からみれば、逸脱として判断されるであろう。ところが、宗教学的な視座からみれば、それらはシャンカラ派の人々によって、シャンカラの宗教思想がどのように受け入れられてきたのかを物語る具体的な宗教現象である。この研究発表では、こうした点に注目しながら、シャンカラ派の宗教伝統における「師と弟子の関係」を意味論的に明らかにしたいと考えている。